

<b>Title</b>	「声の影」：西欧中世の説教資料
<b>Author</b>	大黒, 俊二
<b>Citation</b>	人文研究. 54 卷 2 号, p.55-86.
<b>Issue Date</b>	2002-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	関隆志名誉教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

## 「声の影」

### ——西欧中世の説教史料——

大黒俊二

書かれた説教は生ける声の影にすぎぬ。

ジローラモ・サヴォナローラ

#### 一 説教史料——「声の影」

西欧中世史研究において、説教記録のもつ豊かな可能性が広く知られるようになったのはここ二〇年来のことである<sup>①</sup>。説教記録は近年ようやく、単なる記録を脱して歴史家にとっての史料としての地位を得たといつてよい。それ以前、説教記録は教会史家や思想史家、ときに文学史家が興味を示す程度であり、研究者も修道士など教会関係者がおもであった。それが今日では、説教それ自体が中世最大のマス・コミュニケーション手段として専門研究の対象となるとともに、経済史、心性史、女性史、民衆文化史、美術史などの研究者が素材を求めて説教史料に赴くようになってきている。また中世説教専門の学会が組織されて学会誌を刊行し<sup>②</sup>、近年は説教史料を一覧する総合的な研究『説教』<sup>③</sup>

も現れた。とくに後者はベルギーのブレボルス社が出す中世史料紹介叢書「西欧中世史料類型」の一卷であり、この叢書に加えられたことは、説教が史料類型の一つとして市民権を得たことを示している。説教史料の深さと広がり、ようやく一般史家の目にもふれるようになってきたといえよう。

しかしなぜ説教史料はこうした多様な関心に応えうるのであろうか。説教史料が、その量だけでなく、内にもつ情報の多彩さできわだっているのはなぜであらうか。その理由はおそらく、これが声と不可分の史料であるからである。説教史料そのものはいままでもなく書かれた文字である。しかしその文字は何らかの意味で声に由来し、声を志向している。遠近の差はあれ、オーラルの世界とのつながりを保っているところが、説教史料というジャンルを大まかに規定している。

説教とは肉声による語りである。その語りを記した文字には、最初から書き言葉として記された文字にない具体性があり、そうした文字



には現れてこない別の世界を開示してくれる。この点は中世世界ではとくに重要な意味がある。というのも第一に、説教の聴衆のうち少なからぬ部分は文字を知らなかった。文字を知らない民衆に教えを説くには、民衆の言語、生活世界、声だけのコミュニケーションに頼って語らねばならない。ここから、通常は文字に記されない事象も、説教記録には姿をとどめることになる。たとえば民俗慣行や迷信などにふれた個所は、説教史料の中でもとくに興味深い部分である。第二に、説教記録は生の声に特有の直接性、臨場感をとどめている。「声」とは単なる声ではなく、語り手の表情や身振り、声音や抑揚、場の雰囲気や聴衆の反応までも含みこんだ全体としての「声」であり、そこにはライブのパフォーマンスだけがもつ即興性と一回性の魅力がある。そうした「声」を記した説教史料は、時間をかけて構成と推敲を重ねた書き言葉の対極に位置している。文字がまだまだ十分浸透せず声の比重が高かった中世社会に、「声」からアプローチしようとするとき、説教史料は有力な手がかりとなるのである。

しかしまさにこの点に説教史料の問題性がある。第一は、本来声として存在する語りをなぜ書くのか、なぜ文字記録として残されたのかという問題である。この点は別稿<sup>3)</sup>で論じたのでここでは詳しくふれない。要点をいえば、聖職者はみずから説教する際の範例として他の説教師の語りを書き記し、またとくに説教に有能な者は一般の聖職者が説教を行う際の一助として範例説教を著したのである。他方、俗人は教えを記憶し咀嚼して内面化するために記録した。第二に、文字から

はたして本当に「声」の世界に迫りうるのかという問題がある。文字はしょせん文字であり、それ自体が音声を発するわけではない。かりに声がある程度再現しえたとしても、それが上に述べたような全体としての「声」である保証はない。このことは説教師みずからよく意識していた。中世の生んだ最大の説教師の一人ジローラモ・サヴォナローラは、自身の説教草案に「書かれた説教は生ける声の影にすぎぬ<sup>5)</sup>」と書き記している。「声の影」とは説教史料の特徴をいいえて妙である。説教の「声」一つでフィレンツェの市民を熱狂させ、独裁権力を握った彼は、声と文字の間にどれほど隔たりがあるかよく見通していたのであろう。しかしサヴォナローラならずとも、説教史料を用いる者はまず声と文字の距離に敏感でなければならない。

説教史料が「声の影」であるのは、確かにサヴォナローラのいう通りである。とはいえこれは事実の一面でしかない。少しでも説教史料に目を通してみれば、これが単なる声の模写ではないことがわかるはずである。それどころか文字が逆に声を規定している場面にはしばしば出会う。文字記録の伝統が説教によって初めて生きた声となり、あるいは書字文化固有の慣習が声の表現に侵入するという例は、説教では通常のことである。とすれば説教記録を単に「声の影」として消極的に評価するだけでは不十分であらう。説教の声とは文字があって初めて存在しうる一面をもっている。説教史料の利用に際しては、したがって、文字のあなたにある声だけでなく、文字そのものを注意深く観察する必要があり、説教という行為を声と文字の複雑な絡み合いとして



みていかなければならない。

以下はこうした視点から西欧中世の説教史料を紹介する試みである。これまで私は説教史料にもとづく研究をいくつか発表してきたが、いずれの場合も紙数に制約されて説教史料そのものを体系的に紹介する機会をもてなかった。説教記録は史料として内容に富むばかりか、それ自体が十分通読にたえる面白さをもっている。そうした中世説教の豊かさと面白さを日本語で伝えてみたい、というのが本稿のねらいである。とはいえ中世一千年、西欧全域をカバーするのは本稿では不可能であり、限られた範囲内での紹介にとどまらざるをえない。すなわち時代的には一三世紀から一五世紀まで、地域はイタリアを主とし、説教の担い手としてフランチェスコ会、ドミニコ会などの托鉢修道会に焦点を合わせたい。一三世紀から一五世紀という時代は、説教史における一つの時代というにふさわしい明瞭な特徴をそなえている。まず一三世紀初めに説教専門家集団としての托鉢修道会が出現し、説教の質も頻度も以前とは比較にならないほど向上した。さらに托鉢修道会士たちは「新説教」という独特の説教技法を開発した。当時の説教は一樣にこの新説教のレトリックにしたがって行われ、その様相は説教記録に時代の刻印のごとくに跡をとどめている。また説教記録が、筆録説教と範例説教という二つのジャンルにきれいに分かれて残されているのもこの時期の特徴である。イタリアを中心に見ていくのは、私の専門領域という理由もあるが、当時のイタリアでは俗人の識字能力の高さのおかげで、俗人筆録説教という説教史上きわめて特異な説

教記録が多く残されているためである。

ここでは説教史料を大きく「筆録説教」、「範例説教」、「説教補助マニュアル」の三群に分けて紹介していくことにする。この分類は史料の性格にそった分類であるとともに、この順序は声からの距離にしたがっている。すなわち声にもっとも近いのが筆録説教であり、範例説教、説教マニュアルと進むにつれ書字世界に近づいていく。こうした分類や配列が最良の方法というわけではないが、少なくともこの時期の説教史料を理解する上では一つの有効な視点となりうると思われる。

## 二 筆録説教

説教の語りを聞いて書き記したものが筆録説教である。説教を筆録する習慣は一三世紀、まず聖職者の間に広まり、一四世紀からは俗人もみずからの流儀で書き記すようになった。こうして残された筆録は当時の言葉で *reportatio* と呼ばれ、説教史料の重要な一半をなしている。

説教の聞き書きといえは話は簡単だが、聞き書きのプロセスは一見するよりはるかに複雑である。人は聞いたことをすべて書くわけではない。聞き手は選別し、要約し、書き忘れ、付け足し、ときには後で自己流に書きなおす。また声をすべて捉えるとは限らず、聞き落とし、忘れ、さらには話者の思いもかけぬ誤解や曲解すらすることがある。筆録の言語にしても、語りとは別の言語で書き記すことが中世では珍しくなかった。筆録説教はこうしたさまざまな要素が複合した産物であ



るため、後述する範例説教にくらべてはるかに雑多で個性にとんでい  
る。

〈俗人筆録〉

その極端な例は、書字に可能な限りで語りを完全筆記した例である  
う。そうした例は中世を通じて一つしかない。一四二七年夏、フラン  
チェスコ会士ベルナルディーノ・ダ・シエナ（一三八〇—一四四四）  
が、シエナで行った連続説教を記した毛織物剪毛工ベネデットの筆録  
である。この筆録の現存写本冒頭には、別人の手で次のような序文が  
付されている。（以下、「」は筆者（大黒）による補足であり、  
「」内が聖書の章節表示の場合は『聖書新共同訳』による。ただ  
し引用文中にある聖書の章節表示は、ウルガタ聖書のものである。）

(A) さて大いなる神は、シエナ市民にして毛織物剪毛工ベネデッ  
ト・ディ・マエストロ・バルトロメオなる男に霊を吹き込まれ  
た。この男、妻子あり、財少なければも徳高い人物であったが、  
この「連続説教の」間仕事をうちやり、以下の説教を一語一語の  
verbo ad verbum 書きとどめ、彼「ベルナルディーノ」の語る  
言葉を一つも逃さなかった。この説教は、聖ベルナルディーノが  
シエナのカンポと呼ばれる広場にて、主の年一四二七年八月一五  
日に始められた「ものである」。……さてかのベネデットの偉徳  
にふれるならば、彼は説教の場で鉄筆にて蠟板に書きつけ、説教  
が終わるや仕事場に帰り、例の蠟板に記したものをすべて紙に書

き写した。されば仕事にかかる前に彼は日に二度、説教を書き写  
したのである。この事実を知るものは、人間業としてはまさに奇  
跡と思うべきであろう。かくも短時間にかくも多くのことを二度  
書き、しかもかの聖者の口から出たいかなる小さな言葉も逃さず  
書き写したのであるから。これは以下の本文が証するとおりであ  
る。

ベネデットは、今は知るよしもないが独自の速記法を考案して、ベ  
ルナルディーノの声を記録したようである。「一語一語」、「いかなる  
小さな言葉も逃さず」というのは誇張ではない。これは己をむなしく  
して筆録機械に徹した男による記録であり、筆録の完璧さでは唯一無  
比のものである。

彼の筆録からベルナルディーノの語りをいくつかみてみることにし  
よう。九月三日、ベルナルディーノは「夫は妻を、妻は夫をいかに愛  
すべきか」と題した説教で、夫婦関係のあり方を軽妙なユーモアをこ  
めて語っている。

(B) 「君は妻が君に対して誠実であってほしいと思うか。」「は  
い。」「じゃ君も妻に誠実でありなさい。妻がほしいのに見つけ  
られない連中がたくさんいる。どうしてなのか。こんなことをい  
うからだ。」「僕は賢い女がいいのです。」「お前は愚か者じゃない  
か。これではだめだ。愚か者は愚か者同士の方がうまくいくの



だ。

文中「はい」という返事は、ベルナルディーノが問いかけた聞き手の返事である。ベルナルディーノはしばしば聴衆に問いかけて返事を求め、一方の語りが陥りがちな単調さを避けようとしている。ベネデットはそうした折の聴衆の反応も忠実に記録している。

一人二役の対話はベルナルディーノが初めて説教に取り入れた手法である。右の一節のあと二人の掛け合いはさらに続く。

(C)「君はどんな妻がいいのか」「大食らいの女はいやだな」。「おまえは豚の串焼きを手放したことがないじゃないか」。これはだめだ。「君はどうだ」「働き者がいいな」。「おまえは一日のらくらしているのに」……「君は?」「いうことをよくきく女がいい」。「おまえは父親も母親も誰のいうこともきいたことがないじゃないか。そういう女性はおまえにはもったいない」。「君は?」「善良で、美しく、賢くて、あらゆる徳を備えた女性を希望します」。「答えてやろう。もし君がそういう女性をほしがるなら、君もそういう人間でなければならぬ」。

おそらくベルナルディーノは二人のせりふを、落語のように声音を変えて語ったのであろう。ベネデットの筆録には、語り手の声音ばかりか身振りや表情まで彷彿とさせるものがある。八月二〇日の説教で

「声の影」

悪口の罪を非難するベルナルディーノは、説教壇上である身振りをしてみせたに違いない。

(D) 女たち、そして男たちもよく覚えておけ。こうした連中「他人の悪口をいう者」の臭さ *puzza* は井戸 *pozzi* の臭さと同じだ。井戸はその出口が臭い。連中もこれと同じだ。連中は口が臭い。だから奴らの一人が他人の悪口をいうのを耳にしたら、そのたびに、聞こえるやいなや鼻をつまんで、こうしろ……。そして「くっせえ」といってやれ。それでも彼が悪口をやめないなら、「くさい、くさい」といい続ける。あっちの方を向いて「猛烈にくっせえ」と、少し後ろを向きながらいってやれ。

鼻をつまんで目をそむけながら、「くっせえ」と顔をしかめる説教師の姿が目につかぶようである。また *puzza* と *pozzi* の並置は偶然ではなく、意図的な語呂合わせであろう。

身振りを交えて自在に語るかにみえるベルナルディーノの説教は、じつは周到に構成されたものである。*puzza* と *pozzi* の取り合わせはその場の思いつきではあるまい。場の雰囲気から靈感を得た即興にベルナルディーノ説教の魅力があるのは確かだが、即興だけでは二時間にもおよび長丁場をもたせることはできない。彼は素材の選択と配列には十分気をつかっている。その例としてもう一度九月三日説教をみてみよう。ここで彼は、当時イタリア諸都市に蔓延していた男色の罪



を厳しく弾劾している。

(E) 神の憎む男色者がいて、女は男ほどよくはないなどといった。……彼らはこの悪行ですっかり分別を失ってしまい、どんなに美しい女でも気持ち悪くぞっとし、その美しさにひれ伏そうとしない。こんな奴は神に喜ばれない、絶対に。……男色者全員に女をぶら下げてやりたいものだ。

女はその肉体において、男よりも清潔で高貴なものだ。もしそうじゃないという者がいたら、そいつは大嘘をついているのだ。例をあげて説明しよう。男というのは、神によって泥から造られたものだということは知っているだろう。返事したまえ。「はい」。おお女たちよ、その理由はこうだ。女というものは肉と骨から造られたので、おまえ「男」よりも高貴なものとなった。おお、女がおまえよりも清潔で汚れないことは、おまえの毎日目にしていくことではないか。男も女も体を洗ってきれいにする。こうして洗った後、きれいな水を取ってもう一度洗う。男と女の洗い水をよく見るがよい。どちらが汚いか。男の水の方がずっと汚い。なぜなら、泥を少し洗うと水に泥がまざってあんなに汚くなるのだ。骨と肉を洗っても少しは汚れるが、泥を洗ったときみたいには汚くならない。……男は泥でできているが、女の第一本性は肉と骨であるからだ。泥でできている男が骨でできている女よりも無口なのもその証拠といえる。骨はいつもガラガラやかましい。

おお女たちよ、おまえたちは何と恥知らずなことか。朝、私がミサを行っている間、おまえたちの騒ぎ立てる声といたらまるで骨の山みたいだ。うるさいといったらならない。一人が「ジョヴァンナ！」と呼ばば、もう一人が「カテリーナ！」という。別の奴が「フランチェスカ！」という。ミサにあずかるのに結構な信心ではないか！

自然な流れのようにみえるこの語りも、実際は巧みに構成されたものである。男色を非難するために女性の美しさを対置し、美しさの理由には女は骨で男は泥でできているからだという。これはいうまでもなく、男(アダム)は土から、女(イヴ)はアダムの骨から作られたという「創世記」の故事によっている。しかし骨ゆえに美しいと女性を持ち上げておいて、すぐその後で骨ゆえにやかましいといって女性のおしゃべりを叱っている。非難と賞賛、男と女、具体例が軽やかに交替するこの語りは、明らかに前もって準備されたものである。そうした準備のようすは説教草案(後述する範例説教)が残存している場合、具体的にたどることができるが、右の例の場合残念ながら草案は残されていない。とはいえベルナルディーノの自在な語りは、書字文化の伝統や、下書き・構成という文字を用いた事前の作業に支えられている点をここで確認しておこう。

文字との関わりという点ではもう一つ、ベネデット筆録の中にそれを示唆するものがある。ベルナルディーノは聴衆の中に筆録者がいて



説教を書き取っているのをつねに意識していた。ときおり彼は説教を中断して筆録者ベネデットに語りかける。

(F) だからそこで書いている君、きちんと書き取ってくれ。君が聞き取れるようにいってやろう。その後でもう一度、よくわかるようにくり返しているからな。

ラテン語の引用文や込み入った議論の場合、彼は筆録者を気づかせて声をかけ、あるいは同じ文句を繰り返してやっている。筆録者を気にかけるのは、説教を聞いて書くことの意義を重視しているからである。ベルナルディーノは説教は聞くだけではだめだという。大事なものはその後で「反芻」することだという(この「反芻」*ruguma*という語は文字どおり牛の反芻をさす)。「反芻」のために必要なのは(G)「第一に書くことだ。……書くことで記憶の奥まで送り届けることができる。」<sup>(E)</sup>俗人は説教師の教えを記憶して反芻するために書き、説教師もそれを強く勧めた。こうしてイタリアでは、俗人の識字率の高さも手伝って、数多くの俗人筆録説教が残されることになった。ベルナルディーノが語りの前に文字で草案を練ったように、語りは再び文字にされて聞き手の内面に浸透していくのである。

しかし、繰り返すがベネデットのような完全筆録は他に類がない。通常の筆録説教は大なり小なり要約されたものである。おそらく語りに筆が追いつかないという技術的な理由が大きかったであろうが、そ

れだけでなく聞き手の関心の持ち方が記録の性格を大きく左右する。一五世紀フィレンツェのある女性は、(H)「私はきちんと覚えることができなかった」、「気に入ったことだけを語ろう」と説教筆録に書いている。彼女は説教後、家に帰ってから記憶をたぐりつつ書いたようである。別のフィレンツェ市民は説教の場でメモを取ったらしいが、それでも(I)「この説教師がいったことを私は少し違ったふうにいったり、またいい過ぎたりいい足りなかったりしたかもしれない」と、筆録の不十分さを正直に告白している。一三〇六年、ジョルダノ・ダ・ピーザの説教を筆録した人物は、説教師が(J)「お話ばかりで説教をしない」と文句をいい、「大事なことだけを書く」と記している(ちなみにこの「お話」とは、後述する物語風説教のことである)。そうした要約摘記の例として、一三〇九年、ドミニコ会士ジョルダノ・ダ・ピーザ(一二六〇頃—一三二一)がピサで行った説教のうち、最後の審判を論じたものをみてみよう。これは俗人の手になる筆録としては最古の部類に属する。以下はその冒頭部分である。(以下の(K)、(L)中、カタカナ太字部分は原文ラテン語である。)

(K) 裁きに関する福音について。「人ノ子ハ、栄光ニ輝イテ天使ヲ皆従エテ来ルトキ、ソノ栄光ノ座ニ着ク」。「マタイによる福音書」二五—三二「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く」。



説教の冒頭にはこのように聖書から取った短い一節がおかれ、これを主題として説教は展開される。説教師はまずラテン語で主題を読み上げ、ついで俗語に訳して聞かせ、その後で本来の説教が始まる。

(1) お話 *storia* はしたくない。霊の理解力でこれをほとんど理解できるからだ。説教に入ろう。この福音は「キリスト」再臨の折になされる将来の裁きのことをいっている。この福音では、再臨の折になされる裁きについて三つのことが示されている。すなわち「第一二」裁キノ準備ニツイテ、第二二尋問ニツイテ、第三二断罪ニツイテ、である。この裁きの恐ろしさはこのようにして現れるのだ。

さて第一についてみてみよう。裁きの準備は三つの点、すなわち「第一二」召喚ノユエニ、第二二怒リノユエニ、第三二分離ノユエニ、恐るべき戦慄すべきものとなる。この準備は召喚という点で戦慄すべきものだが、それには全般性ユエニ、原因ユエニという二つの理由がある。神は天使を喇叭とともに遣わし、善人も悪人もすべての人々を、天使も聖人も、かつて生まれた人もこれから生まれる人も、すべての者を地位を問わず召喚する。その声に突如すべての死者は三〇歳のときの姿で蘇る。すべての者が集められ、そこにはすべての天使と聖人もいる。しかし罪人はこの召喚のとき、召喚のさまを見てぶる震える。人が自分の恐れ死罪で召喚されたとき、恐れで鞭のように震えるさまを思っ

みよ。とすれば、これほど偉大な裁判官の前に召されたとき、どれほど身を震わすだろうか。こうした場面を、またそのとき罪人がどんな状態にあるかを思ってみよ。

要約筆記であるため先のベネデット筆録にくらべて表現に生彩が乏しいのはいた仕方がないが、それでもこれは新説教の構造を的確に捉えている点で貴重である。最初の「お話」とは、主題の内容をかみ砕いて物語風に語ることをさし、当時「物語風説教」*sermo historialis* と呼ばれた説教技法である<sup>21</sup>。ジョルダノは本説教では主題解説は不要で、ただちに説教に入るといっているのである。その後主題の含意として裁きの「準備」、「尋問」、「断罪」の三点をあげる。これが主題分割である。以下の説教は大きくこの三つの話題に即して展開される。ついでこうして分割した第一の部分「準備」に入り、「準備」は「召喚」、「怒り」、「選別」という三つの点で恐るべきものだという。次には「召喚」が恐ろしい理由として「全般性」と「原因」をあげる。このように主題を分割し、分割した各部分を再分割し、さらにその各部分を再々分割していくという手法が「新説教」*sermo modernus* の特徴である。ほぼ同数——二から五——の分割を重ねていくことで、説教はすぐれて建築的な構造をもつことになり、記憶にとどめやすくなる。ベルナルディーノの説教も、先の引用では読み取れないが基本的にこの技法にしたがってなされている。本稿で取り上げる一三世紀から一五世紀の説教史料は、一様にこの新説教の跡をとどめており、



その意味で分割による展開は時代の刻印ともいいうるものである。

〈聖職者筆録〉

さて、これまでみてきたのは俗人筆録説教、すなわち俗人が俗語で書き記したものである。これに対し筆録説教には聖職者の手になるもの一つの系列がある。両者はあらゆる面で対照的である。俗人は説教を記憶し内面化するために書いたのに対し、聖職者はみずから説教するのためのモデルとして筆録した。また俗人は俗語で書いたが聖職者は一貫してラテン語で筆録している。説教の言語は、聴衆が俗人のときは当然彼らの解する俗語であったが、大学や修道院での説教はラテン語が普通であった。しかし説教が俗語であれラテン語であれ、聖職者の筆録はつねにラテン語でなされているのが特徴である。

つまり聖職者は俗語の語りもラテン語で記録していたことになる。彼らは耳が捉えた俗語を瞬時にラテン語に訳してメモを取り、後にそのメモをもとに説教を復原した。今日残されている聖職者の筆録はこうした二重のプロセスを経て成立したものであり、また残存しているのは大部分復原テキストの方である。メモはテキスト復原後破棄された。しかしまれにメモが残されている場合がある。次にあげるのは同一説教についてメモと復原テキストの双方が伝来している珍しい例である。これは一二七三年一〇月二二日、アルヌー・ル・ベスコシエがパリのベギン会礼拝堂で行った俗語説教の記録である。

(M) メモ

復原テキスト

悔悛者の食物は、現在の艱難と辛苦というパンである云々。これについては「列王記」三二二「列王記上」二二二—二七「彼に艱難のパンと辛苦の水をあてがっておけ」をみよ。「列王記」三ではエリヤについてこういわれている。彼はイゼベルを逃れてエニシダの影で眠り込んだ。イゼベルを逃れたエリヤは堆肥なし出血と解されるが、悔悛者を意味している。悔悛者は肉の衝動と快楽を避け、捨て去る。その彼に主の天使は「起きよ、お前の道はまだ遠い」といった。彼は目をさますと、灰の下のパンと水瓶を見出した。灰でできたパンは悔悛のパンを意味する。というのは、灰が柔らかいさまざまな部分

灰の下のパンは悔悛のパンである。なぜなら告解においてさまざまの部分から。

灰が柔らかいさまざまな部分



からできているように、悔悛は柔らかい肉と、告解においてはなされたさまざま小さな部分からなっているからである。だがこのように悔悛し告解した者がまた眠り込み、罪に返ることがある。彼のもとに送られた天使は大いなる熱意と配慮をもって彼を監視し、こういう。「起きよ」、起きよ、

起きよ。お前は眠ってはならぬ。

お前はここで眠ってはならぬ、「なぜなら「道は」遠いから」云々。

わずかなメモから語りがみごとに復原されていくようすがわかる。筆録者は記憶の新たなうちに復原を行ったのであるが、この筆録者については、さらに別人のメモを参照したことがわかっている。同一説教を複数の人間が筆録し、後でそれを融通し合って復原作業を行っていたようである。

聖職者による筆録は、俗語説教の場合、ラテン語への翻訳という段階を経るため、俗人筆録にはない問題が生じてくる。第一に、そもそもなぜ俗語の語りをラテン語で記すという迂遠な方法を取ったのかと

いう問題がある。この点は別稿で論じたので詳説は控えるが、簡単にいえば、中世において書字言語の中心にあったラテン語は、独自の略記法をはじめさまざまな速筆の技法を生み出し、そのためラテン語に習熟した聖職者にとって、言語の違いという壁をこえてもラテン語で書く方が早く能率的であったのである。第二に、俗語をラテン語に訳すことから生じる問題がある。たとえばラテン語に訳しきれず、あるいは適切な該当語がないため、俗語がラテン語筆録にそのまま残ってしまうことがある。一二七〇年代、ラニユルフ・ド・ラ・ウブロニエールがパリで行った俗語説教のラテン語筆録は、各所に中世フランス語の語彙や表現をとどめている。また言語構造がラテン語とは大きく異なる俗語を急いでラテン語とすると、多くの誤解や曲解を生み出してしまふ。一二世紀後半、ドイツ語説教で名をはせたベルトルト・フォン・レーゲンスブルクは、(N)「無学な聖職者や修道士が、「私の説教を」語や文の意味を理解せず、わかるところだけを書こうとしたため、多くの誤りを書き記してしまった」と嘆いている。この「誤り」は単に「無学」によるばかりでなく、ドイツ語とラテン語の距離の大きにもよるものである。

ラテン語への翻訳、メモから復原へという手順をふむ聖職者筆録は、ときに俗語とラテン語が混交した奇妙な文体——いわゆるマカロニ体 *maccherones*——を生み出すことがある。一四九三年、フランチェスコ会士ベルナルディーノ・ダ・フェルトレ(一四三九—一四九四)がバヴィアで行った説教の筆録はその典型である。次に掲げる一節は、



彼がパウリア市民を前に、貧者救済のため、モンテ・ディ・ピエタという公益質屋の設立を呼びかけている個所である。<sup>(27)</sup>ただこうしたら、俗混交体を翻訳で再現するのは至難であり、ここでは一つの方便としてラテン語部分をカタカナ太字体で表記してみた。これでも多少の雰囲気は伝わるはずである。後に付した原文も太字部分がラテン語である。

(O) 貧者ハ多く、金は少ないコトヲ思ッテミヨ。カリニ「金ガ」アッテモ分ケ方ガヨクナイ。ナゼナラある者には多く、ある者には少なくあるからだ。主ハ、貧者ガユダヤ人ノ餌食ニナラナイヨウ助ケテヤロウト思ッテ、コウイワレタ。「オ金ノ山ヲ築コウ。ソコデハオ金ガ入用な者はキチント世話してもらえ。オ金ノ山ガ大キケレバ、援助モ大キクナル。お金が少しダト、分ければ一カニカ三ノヨウニわずかになつてしまふ。コノ山ハ立派ナ人物ノ手ニ委ネルベキダ。貸シ出ス側ハ、安全のために、証文や口約束ではなく質ヲトル。質ヲトル方ガ確実ダカラダ。」

Considerato quod sunt multi pauperes e pochi denari; et si bene sunt, sunt male divisi, quia chi troppo, chi pochi; et volendo subvenire ne pauperes devorentur a Judeis, dicit Dominus: Faciamus unam congregationem denariorum, ubi fideliter sia servito a chi ha bisogno de dinar; et quanto maior sit congregatio nummorum, sic fiat proviso. Si sunt pochi denari, se parti sutili: unum, vel duo, vel tres etc.. Ista autem congregatio sit

posita in bona manu; et ut illi qui mutant, per più securità, non vol scritto nè obligatione, sed pignus, quia tutius est incumbere pignori.

こうしたラ・俗混交文は——当時流行したマカロニ体の詩と違い——意図的に作られたものではなく、俗語のラテン訳、メモからの復原、復原テクストの別人による筆写などの過程でテクストが変成し、徐々に形づくられてきたものと考えられている。<sup>(28)</sup>しかし筆録もここまでくると、もはや生の声から遠くかけ離れたものとなつてしまつている。

#### 〈説教の周囲〉

ところで筆録説教に記されているのは説教師の語りだけではない。筆録者が自身の感想を書きとどめている例はすでにみた通りである(H)、(I)、(J)。それ以外にも筆録者は、しばしば説教現場の雰囲気や説教師の所作、聴衆の反応などを描写しており、それらは説教師と聴衆が一体となつて生む演劇的空間の熱気を伝えてくれる。

一五世紀後半、イタリア各地を遍歴説教して回つたフランチェスコ会士ロベルト・ダ・レッチェ(一四二五—一四九五)は、説教壇に小道具をもちこみ芝居がかった説教をするので有名であった。一四五一年一月一七日、パドヴァでの「死について」と題する説教では観衆を小道具に使っている。筆録者はそのさまをこう描写している。

(P) こういうと手に観衆をもち、聴衆に見せながらこういった。



「お前の富は、豪邸は、遊びは、踊りはどこにあるか。目は、鼻は、美しい髪は、耳はどこにあるか。お若者よ、老人よ、厚顔なる女よ、*slisata* [?]よ、私もかつてはお前たちのようだった。私は目を、手を、舌を、両親を、子供を、友を、土地も家も失ってしまった。後に残してきた。お前たちもやがてこの私のようになるのだぞ。」お世俗の豪奢よ、魂を罰せられぬよう気をつける。そしてお前、虚飾よ、この懺悔をみるがいい。

おそらく説教師は手で懺悔の口を動かしながら、右のような文句をしゃべらせたのであろう。安手の田舎芝居のような小細工だが、それでも効果はあったようである。「すると聴衆は、「聖アントニオ様、私たちのために祈って下さい」、「お慈悲を、お慈悲を」と叫び始めた。しかしここで懺悔が語る栄華のむなしさと死のおぞましさは、中世末期の人々の心性に深く根づいたものであった。生のあやうさを説く「今いずこ(どこ)にあるか)」「*Eni sunt*」という当時流行のルフランが、ここに顔をのぞかせている点に注意しておこう。中世末期、黒死病の恐怖のもとで「死を思え」の警句がやはり、「死の舞踏」のイメージが氾濫する中で、説教もそうしたイメージの流布に一役買っていたのである。

ロベルトはまた、一四五五年の「最後の審判についての説教」では、説教壇上で受難のキリストをみずから演じてみせている。

(Q) とうとうとロベルト師は両手で茨の冠を取り、自分の頭へのせ、ついで聴衆に十字架を見せた。「この十字架を見よ」。また海綿を取って口にあて、こういった。「私がお前たちのためにどれほどのことをなしたか見るがよい、頑なな罪人よ。お前たちのために私はわが血をあたえ、脇腹を裂いてお前たちの罪を贖おうとしたのだ。」また聴衆に槍を見せ、それを自分の脇腹に本当にあてたので、まるで彼みずから槍に貫かれたようだった。聴衆は皆「お慈悲を、お慈悲を」と泣き叫んだ。……聴衆は皆、わが胸を打ちながら「お慈悲を、お慈悲を、お慈悲を」と絶叫した。

当時の説教師の中には、壇上で派手な立ち回りを演じ、あるいは口から泡を吹き、気絶して倒れてみせる者もいたという。後述する説教術書はこのような芝居があった所作を戒め、説教はあくまで言葉による教化であることを強調している(後述(J)参照)が、このことは逆に、当時の説教が演劇性を強く帯びたものであったことを証している。説教壇の周囲は聴衆の涙と笑いと絶叫に満ちた空間であった。こうした演劇性は説教史料を読む際つい忘れがちだが、留意しておくべきことである。

そうした面を補ってくれるのが図像資料である。当時の托鉢修道会士の説教のようすは、数多くの絵画や写本挿画に残されている。図像は説教史料とは呼びえないにしても、これらを用いて言葉と絵の双方から説教の現実に迫った研究が、近年すぐれた成果を生んでいること



を付言しておきたい。

### 三 範例説教

#### 〈範例説教〉

筆録説教が聞き手の側の記録であるのに対し、範例説教は語り手が残した記録である。当時の説教師は説教を行うにあたり、その場にふさわしい主題とその分割や展開法を記した草案をつねに手元に用意していた。この草案によりつつ、聖職者向けにはラテン語で、俗人相手には俗語で語りかけたのである。草案は当の説教師みずから創作することもなかったわけではないが、多くの場合、説教に堪能な他の説教師が書き著した範例に、状況に合わせ手を加えつつ語るのがふつうであった。このように説教師用のモデルとして書かれたものが範例説教である。聖職者向けであるからすべてラテン語で書かれている。ここで扱う一三—一五世紀において、写本に単に「説教」sermoと記されているもの多くは実際は範例説教である。ただ、「説教」だけでは上述の筆録説教と区別がつかないため、この類の説教史料をとくに「範例説教」model sermonと呼ぼうというD・L・ダウレイの提言<sup>28)</sup>が広く受け入れられ、定着している。

範例説教は最初から文字で知的に構成されたものだけに、要約や脱漏の多い筆録説教にくらべて全体の構造をつかみやすい。新説教のレトリックはここでははっきり姿を現す。フランチェスコ会士ボナヴェントゥラ（一二二—一二七四）の『日曜説教集』から「待降節第三

日曜日」説教をみてみよう。ここでは冒頭に副主題 prothema がおかれ、それに短い展開がともなっている。

(R) 「副主題」 「ペテロがこれらの言葉を話していると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った」 「使徒言行録」一〇—四四。今示したこの言葉によって、いかなる説教師にも有益な三つのことが述べられている。第一は話者の堅固さであって、これは「ペテロが話している」という言葉で示される。ペテロは知者と解される。第二は注入者の迅速さであり、これは「聖霊が降った」で示される。第三は聴衆の数の多さであり、これは「御言葉を聞いている一同の上に」で示される。これら三つにより我々は皆、神の憐れみの恵みを乞い、それによって話者は堅固な言葉で満たされ、聴衆は多くの聖者のただ中に立ち、ついには話者も聴衆も、すみやかに入り来る聖霊を我が身の内に感じ取れることを期待しよう。こうすることにより私は何かを語り、あなたがたはそれを理解することができよう。それが我らの仲介者「中心者」Mediatorisには栄光と賞賛となり、我らの魂には救いと慰めにならんことを。アーメン。<sup>29)</sup>

副主題は、聴衆に傾聴を求め、あるいはこの場合のように説教師が説教の成功を祈る内容のものが多し。話者、聴衆ともに説教にむけて心がまえをする導入部分である。副主題を欠く説教も多いが、副主題



をおくのは新説教独特の慣習である。ここでは最後の「仲介者」[中心者] *Mediatoris*」によって、以下の説教本体とのつながりが示唆されている点に注意しておこう。

次に主題とその分割がきて本来の説教が始まる。

(S) 「主題」 「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方が

おられる」 *Medius autem vestrum stetit, quem vos nescitis.*

「ヨハネによる福音書」一一二六」。

「主題分割」 「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」。洗礼者ヨハネは大いなる聖性の持ち主であり、多くの人々によってキリストとみなされていたが、ユダヤ人たちからキリストであるかと問われて、真実を答えた。つまりキリストではないといったのである。しかしこのキリストについてのユダヤ人たちの質問に対して彼は、信仰の使者および真理の布告者として、上記の言葉「あなたがたの中には……」をつけ加えたのである。この言葉によって彼は、第一に調停者としての職務の適切さを示し、第二に受肉した言葉の存在を主張し、第三にユダヤ人たちの怠慢を非難したのである。第一に、「あなたがたの中には」 *Medius autem vestrum* によって調停者としての職務の適切さを主張し、第二に「おられる」 *stetit*、つまりあなたがたの中に今いるという言葉によって受肉した言葉の存在を示し、第三に、「あなたがたの知らない」 *quem vos nescitis* によってユダヤ人

たちの怠慢を非難したのである。<sup>(55)</sup>

主題分割は、さきのジョルダノの場合(L)のように主題の含意によることもあるが、通常はこの例のように主題文を文字どおり分割し、各部分に解釈を施していくという形をとる。ついで第一分割がきて展開が始まる。

(T) 「第一分割」 ゆえに「あなたがたの中には」 *Medius autem vestrum* といわれたのである。ここでは調停者としての職務の適切さに注意すべきである。王座の中心 *medius* を占める者が職務においても中心を占め、創造の過程で中心にあった者が再創造の過程でも中心にあって、世界を創造した言葉が世界を再創造するのはまことにふさわしいことである。さてキリストこそ適切なる中心であるが、それは彼が、第一に受肉によって驚嘆すべき結合をなしとげたからであり、第二に行動によって規範と教義をあたえたからであり、第三に受難によって生の力を行使したからである。<sup>(56)</sup>

第一分割では「中」 *medius* の語に注目して、この語に秘められた意味を掘り起こしている。キリストは三つの意味で「中心」であると説き、今度はそのそれぞれについて再分割で説明を加えていく。



(U) 「第一再分割」第一にキリストは受肉によって驚嘆すべき結合の中心となった。というのも彼において二つの極端、つまり神性と人性の極端が奇跡的に結びついているからである。……

「第二再分割」第二にキリストは行動によって規範と教義の中心であり、語りにおいて真理の中心から、また行動において廉直の中心から決して遠ざかることがなかった。というのもあらゆる種類の美徳や元徳においてつねに中心を保持していたからである。……

「第三再分割」第三にキリストは受難において生の力の中心であり、そこでは「神は」地のただ中で medio 救いの御業を果たされた<sup>(9)</sup>。「詩篇」七四—一二」。……

こうして分割、再分割を重ね、特定の語の隠れた意味を掘り起こし、また聖書の権威を引用しながら話を展開していくのが新説教の特徴である。これに後述する教訓説話をはさむこともある。右の例の場合、第一分割はおもに *metus* のさまざまな語義を探りつつ展開する方法をとっているが、これは「聖書語釈」という技法（後述）である。主題の分割法、権威の引用の仕方、語釈や教訓説話の活用などによって、いかに華麗に説得的に議論を展開していくかが説教師の腕の見せどころであり、範例説教が範を示すところである。

#### 〈範例説教集と教会暦〉

今みたボナヴェントゥラの説教は、年間の日曜日に行う説教を集めて一本とした『日曜説教集』の中の一つである。範例説教が単独で残

される例はほとんどなく、大部分がこのように用途に合わせて編纂された説教集の形をとっている。つまりダヴレイのいう「範例説教集」model sermon collection が伝来の基本的な形である。範例説教集には用途によりいくつかタイプがあるが、J・B・シュナイヤーによれば<sup>(10)</sup>おもなものは次の四つである。

- 一 教会暦説教集 *Sermones de tempore*
- 二 聖人祝日説教集 *Sermones de sanctis*
- 三 通聖人説教集 *Sermones de communi sanctorum*
- 四 四旬節説教集 *Sermones de quadragesima*

一、二、四はいずれも教会暦にそって編集されており、年間のさまざまな祭日にふさわしい説教を集めている。ボナヴェントゥラの『日曜説教集』も教会暦にしたがった説教集の一つである。三は、特定の聖人ではなく、「使徒」、「福音史家」などのように類似の聖人に共通して利用できる説教範例を集めたものである。

このように範例説教集が基本的に教会暦にしたがって作成されている事実は、説教を理解する上でも重要な意味をもつ。教会暦上の位置は、当日の説教主題の選択や説教内容まで規定しているのである。たとえば降誕祭の説教には、「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた」（「イザヤ書」九一五）のようにキリスト降誕にふさわしい主題が選ばれ、内容も降誕の意義を説明し、寿ぐものとなっている。



一例としてボナヴェントゥラの『教会曆説教集』の構成を以下に掲げ  
ておへ。

- (A)
- |    |   |    |   |
|----|---|----|---|
| 1  | Dominica prima Adventus (待降節第一日曜日)                    | 17 | Dominica in Septuagesima (七十旬節日曜日)                                  |
| 2  | Dominica secunda Adventus (待降節第二日曜日)                  | 18 | Dominica in Sexagesima (六十旬節日曜日)                                    |
| 3  | Dominica tertia Adventus (待降節第三日曜日)                   | 19 | Dominica in Quinquagesima (五十旬節日曜日)                                 |
| 4  | Dominica quarta Adventus (待降節第四日曜日)                   | 20 | Dominica prima in Quadragesima (四十旬節第一日曜日)                          |
| 5  | Vigilia Nativitatis Domini (降誕祭前夜) [十二月二十四]           | 21 | Feria tertia post primam Dominicam Quadragesimae (四十旬節第一日曜日後火曜日)    |
| 6  | De Nativitate Domini (降誕祭) [十二月二十五]                   | 22 | Feria quarta post primam Dominicam Quadragesimae (四十旬節第一日曜日後水曜日)    |
| 7  | Dominica infra octavam Nativitatis Domini (降誕祭後第一日曜日) | 23 | Feria quinta post primam Dominicam Quadragesimae (四十旬節第一日曜日後木曜日)    |
| 8  | Circumcisio Domini (主の割礼) [一月一日]                      | 24 | Feria sexta post primam Dominicam Quadragesimae (四十旬節第一日曜日後金曜日)     |
| 9  | Vigilia Epiphaniae (公現祭前夜) [一月五日]                     | 25 | Dominica secunda in Quadragesima (四十旬節第二日曜日)                        |
| 10 | Epiphania (公現祭) [一月六日]                                | 26 | Feria secunda post secundam Dominicam Quadragesimae (四十旬節第二日曜日後月曜日) |
| 11 | Dominica infra octavam Epiphaniae (公現祭後第一日曜日)         | 27 | Dominica tertia in Quadragesima (四十旬節第三日曜日)                         |
| 12 | In octavam Epiphaniae (公現祭後八日曜日)                      | 28 | Dominica quarta in Quadragesima (四十旬節第四日曜日)                         |
| 13 | Dominica II Epiphaniae (公現祭後第二日曜日)                    | 29 | Dominica in Passione (受難の日曜日)                                       |
| 14 | Dominica III Epiphaniae (公現祭後第三日曜日)                   | 30 | Dominica in Palmis (枝の主日)   |
| 15 | Dominica IV Epiphaniae (公現祭後第四日曜日)                    | 31 | Feria secunda post Dominicam in Palmis (枝の主日) 後月曜日)                 |
| 16 | Dominica V Epiphaniae (公現祭後第五日曜日)                     | 32 | Feria quinta in Coena Domini (主の晩餐の木曜日)                             |



- 33 Feria sexta in Parasceve (聖金曜日)
- 34 Sabbato Sancto (聖土曜日)
- 35 In Resurrectione Domini (復活祭) [移動祝日]
- 36 Feria secunda post Pasqua (復活祭後月曜日)
- 37 Dominica in Albis (白衣の日曜日) [復活祭後第一日曜日]
- 38 Dominica II post Pasqua (復活祭後第二日曜日)
- 39 Dominica III post Pasqua (復活祭後第三日曜日)
- 40 Dominica IV post Pasqua (復活祭後第四日曜日)
- 41 Dominica V post Pasqua (復活祭後第五日曜日)
- 42 In Ascensione Domini (主の昇天) [復活祭の四〇日後]
- 43 Dominica infra octavam Ascensionis (主の昇天後第一日曜日)
- 44 In Pentecoste (聖霊降臨祭) [復活祭後第七日曜日]
- 45 Dominica prima post Pentecosten (聖霊降臨祭後第一日曜日)
- 46 De Trinitate (三位一体の祭日) [聖霊降臨祭後第一日曜日]
- 47 Dominica secunda post Pentecosten (聖霊降臨祭後第一日曜日)
- .....中略.....
- 70 Dominica vagesima quarta post Pentecosten (聖霊降臨祭後第二十四日曜日)

この一覧から、待降節に始まり降誕祭と復活祭を二つの山とする教会暦にそって、範例説教が構成されているようすが読み取れる。またここからは、降誕祭前の待降節と、復活祭前の四旬節がとくに説教の活発に行われる時期であることもわかる。とくに重要なのは四旬節で、一年のうち説教がもっとも集中して行われるのがこの時期であった。四旬節とは、受難の金曜日と復活の日曜日を前に、キリストの受難を思いつつ告解し罪を悔い改める期間であり、人々を悔い改めに誘う上で連日の説教が大きな役割を果たしていた。範例説教集にこの時期に的を絞った『四旬節説教集』が多いのもこのためである。

それゆえ、説教を正しく理解するにはその説教の教会暦上の位置を確かめておく必要がある。逆に教会暦上の位置が変則的である場合、その説教はなんらか特別の意図をもって行われているとみななければならない。たとえば第二章冒頭でとりあげたベルナルディーノ・ダ・シエナの連続説教がそれである。これは一四二七年八月一日に始まり、一〇月初旬まで続けられた。通常この時期に連続説教が行われることはない。この説教を提案し、ベルナルディーノに依頼したのはシエナ市の当局である。その頃シエナでは、前年来の党派抗争が昂じて、武力抗争にいたる寸前の状態にあった。この一触即発の危機を回避するため、市当局は同郷の名高い説教師ベルナルディーノに平和の説教を依頼したのである。ベルナルディーノも連続説教の間、繰り返し「党派争い」を説教の主題に取り上げてこの要請に応えている。それゆえ説教には二つの文脈があることになる。一つは説教そのも



のの文脈、もうひとつは説教が行われる場の文脈である。後者は多くの場合教会暦上の位置によって決まるが、ベルナルディーノの平和説教のようにこれとは無関係なものもある。そうした特別説教としては、平和説教以外にも婚礼説教、葬礼説教などがある。ただ数はそれほど多くない。大多数は教会暦にそった説教である。ともあれ、説教の正しい理解には、この二つの文脈とその相互関係に留意する必要があることを強調しておこう。

〈旅する範例説教集〉

範例説教集の著者は、これが現場の説教師のための補助文献であることをよく承知していた。著者は序文でしばしば読者すなわち説教師に対し、範例を鵜呑みにすることなく、各人が創意を發揮し、また聴衆や場の性格に合わせて、これらを自由に改変して用いることを勧めている。たとえばギ・デヴルーやベルナルディーノ・ダ・シエナはこう述べている。

(W) 本書の冒頭でいっておかなければならないが、「本書に収められた」説教が長すぎるように思われても心配するには及ばない。というのもこれらの説教は各説教師が、神学にうとくても、みずからの必要に応じて容易に短縮できるよう構成・編集してあるからである。(ギ・デヴルー)

(X) 本論文を以下のように配列したが、思慮学識に富む説教師は前後を入れ替え、手を加え、伸縮せしめて、また聴衆の性格と

必要に合わせてこの順序を変更して差し支えない。(ベルナルディーノ・ダ・シエナ)

そして説教師の側も範例説教集にはまことに自由な態度で接している。現在残されている範例説教集のうち、さきにもたボナヴェントゥラの『日曜説教集』のように、一人の著者がすみずみまで書き下ろしたものはむしろ少数である。伝来する大半の範例説教集は、説教師がさまざまな範例説教集や筆録説教から素材を集め、自己流に編纂し直したものであり、説教現場での使用という実用的性格を色こくとどめられている。そこでは範例説教はしばしば要約され、ときには極端に切りつめられて、ほとんど骨格をとどめるにすぎないものもある。

たとえばドミニコ会士アルドブランディーノ・デ・カヴァルカンティ(二二二七—二二七九)の範例説教集中、四句節第一日曜日後金曜日の説教は以下のようなものである。

(Y) 「主題」「みよ、おまえは癒された」。「ヨハネによる福音書」五「一一四」。

かの病者とは、恩寵を受けるかまえができたとき、主に癒された罪人を意味する。彼の健康の印は、身体の健康と同じく七つある。

第一は正常な脈であり、これは霊的には、魂において謙遜が傲慢に対してもたたらすものである。「曲がった道はまっすぐに、陰



しい道は平らになる」。「イザヤ書」四〇「一四」。

第二は健全な食欲であり、これは愛が嫉妬に対してもたらすものである。嫉妬は他人の不幸を望み、幸福を嘆く。「愚かな者は害あることを望む」。「箴言」一「二二」。

第三は五体の調和であり、これは忍耐が怒りに対してもたらすものである。怒りは、「詩篇」のいうごとく五体の不調和をもたらす。「わが目、わが魂、わが腹は怒りで乱された」。「詩篇」三〇「一〇、三一―九」。

……………後略……………

これで説教全体の約半分であり、これだと通して読み上げても五分とかからない。それにこの素気ない文体では語りの体をなさないであろう。それでも練達の説教師は、この骨組みをもとに、ゆうに一時間をこえる説教を紡ぎ出すことができたのである。骨格と化してしまつたこの説教は、また構成の巧みさをよく示している。主題中の「癒された」から七つの意味を引き出し、これを分割として用いている。分割のそれぞれにおいては、身体の健康と魂の健康が、美德と悪徳を対比しつつ語られている。心身の健康を、中世に広く流布した七つの美德、七つの悪徳とシンメトリックに対比しながらの展開は、幾何学的といつてよいみごとなものである。

このようにぎりぎりまで短縮するのはそれなりの理由がある。当時の托鉢修道会士は各地を広く遍歴して説教するのがつねであった。説

教行脚に大量の書物を持ち歩くわけにはいかない。説教師たちは荷を軽くするために、説教に必要な事項を簡潔に記した小型本を携行していた。そうした遍歴説教師用の小型本はいくつか残されており、そこには範例説教とともに教訓説話や聖書語釈、聖書用語索引まで収められている。説教師はこの一冊でたいの場面に対処することができた。こうして小型本に記された範例説教集は説教師の頭陀袋びんに入られて各地を旅し、行く先々で声となって民衆の耳に届いた。範例説教集は旅する書物であり、その小さな版型とやせ細つた説教テキストは、見かけとは逆に説教の声が届いた世界の広さを証しているのである。

#### 四 説教補助マニユアル

説教師は範例説教をもとに説教を行った。したがって説教の準備とは、その日その場の説教にふさわしい範例を用意することである。範例説教の作成には、これを一から創作するにせよ、他の範例に手を加えるにせよ、かなりの書物を参照しなければならない。説教の前夜、範例を練る説教師の周囲には、聖書を始めとして教父著作、聖人伝、教会法、神学論、はてはローマ古典や同時代の俗語文学作品までおかれていたはずである。それゆえほとんどの著作が説教補助文献たりうるといえるが、その中でもとくに説教と関わりの深い著作ジャンルがある。これらを「説教補助マニユアル」と呼ぶとすれば、これには大きくみて「教訓説話集」、「聖書語釈集」、「説教術書」の三種類がある。



〈教訓説話（集）〉

まず「教訓説話集」からみていこう。「教訓説話」*exemplum*とは、教えを具体的に例示*exemplum*するために説教の中にはさむ小話である。もう少し厳密に言えば、C・ブレモン/J・ルゴフ/J・C・シュミットのいうように、「救済をもたらす教訓によって聴衆を説得するために、語り（通常は説教）の中には含まれる、真実味ある短い物語」となる。的確な定義であり、つけ加えることはない。

教訓説話が説教の文脈で活用されるようすを、ラニユルフ・ド・ラ・ウプロニエールの説教筆録からみてみよう。これは一二七三年四月二日、枝の主日（復活祭一週間前の日曜日、上述（V）参照）、パリで行われた説教である。ラニユルフは当日の主題「大勢の群衆が自分の服で道をおおった。ほかの人々は木の枝を切って道に敷き、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホザンナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。』」「マタイによる福音書」二一―八―九」を次のように三分割する。

- 第一分割 栄光のエルサレム入市と、恥辱のエルサレム脱出
- 第二分割 復活祭に向けて道を清めよ
- 第三分割 復活祭に向けて道を飾れ

このうち第三分割は、さらに三つに再分割される。

- 第一再分割 衣服で道を飾れ（＝悔悛せよ）
- 第二再分割 枝で道を飾れ（＝貧者に施せ）
- 第三再分割 主の前で歌え（＝祈れ）

この中の第一再分割で教訓説話が用いられている。前後の文脈とともに引用してみる。太字の部分で教訓説話である。

(Z) きれいなマントをはおった御婦人は、それを道に広げたりはしない。また多くの者は、若くて美しい間は悔悛の行にすすんで身を捧げようとはしない。……多くの者は嬉しいときには喜んで主の友となるが、悲しいときにはなろうとしない。彼らは尻だけが強いロバのようなもので、悔悛の十字架を前にすると弱腰になってしまう。彼らは主の受難を分かち合おうとはしない。「復活後のキリストのような栄光に包まれたいか」と問われれば「はい」と答えるくせに、「聖金曜日（復活祭前日）のキリストのようになりたいか」と聞かれると「いやだ」と答える奴がいたが、これと同じだ。ある司祭についてこんな話を聞いたことがある。彼がほかの仲間二人と一緒に森を歩いていると、強盗がやって来た。こわくなった二人の俗人は司祭にいった。「お坊様、力と勇気を出して私たちを守って下さい」。「旦那、わしは坊主じゃから人を害したり攻撃したりはできんじゃよ」。なんとか逃げおおせた。少し行くと今度は三人の美女がやって来た。俗人二人が美女をほしがると、



司祭もほしがった。そこで俗人はいった。「いけません。あなたはお坊様ですから、女を相手にしてはいけません。」司祭は答えた。「わしは坊主でも、男じゃ」。こうして楽そうなときは友になり、苦勞や危険があると逃げるのだ。

ここでは、復活祭まであと一週間と四旬節も大詰めを迎えたところで、信徒にあらためて悔悛と喜捨と祈りを促す説教の中で、教訓説話が用いられている。このように文脈に依存して提示されるのが教訓説話本来の姿である。

右の例は筆録説教であるから、語られた説話をきちんと記しているが、範例説教では「ここに教訓説話を入れる」とだけ指示されていたり、あるいは指示すらないものもある。どこにどのような教訓説話を入れるかは、かなりの程度現場の説教師に任されていた。そうした説教師の必要に応えるために編まれたのが「教訓説話集」*exempla*である。一三世紀以降この種の説話集がいくつも書かれており、それらは説教師の使用の便を考えて説話を用途別、主題のアルファベット順などに配列している。

教訓説話集は説教史料の中ではわが国でも比較的よく知られている分野なので、ここでは少し毛色の変ったものを紹介してみよう。ドミニコ会士フィリッピーノ・ダ・フェッラーラ（一二九〇頃—一三五〇頃）作の『食卓の書』である。本書が教訓説話集であることは事実だが、編纂の意図と説話の配列は伝統的な教訓説話集の枠を一步はみ

出している。フィリッピーノは教訓説話を説教の場だけでなく、日常生活のあらゆる場面で教化に利用できるように本書を編纂したという。序文で彼は編纂の意図をこう述べている。

(A) 説教者修道会士「ドミニコ会士」にとり、いつでもどこでも必要なとき、ためになる事柄を語りうることは名譽なことであり意義あることである。ところが高位の聖職者でも、あらかじめ準備しておかなければ言葉につまることがある。そこで私こと説教者修道会士フィリッピーノ・ダ・フェッラーラは、私自身と本書を歓迎する他の人々のために、本書を八巻に分けることにした。

こうして以下では、食卓、炉辺、旅の路上、病者見舞、肉親を失った人の見舞、被災者の見舞、友情、罪と徳、の八章に分けて説話を配列している。食卓や炉辺で語られる教訓説話は、確かに説教臭さとキリスト教モラルを引きずってはいるけれども、説教の文脈からはすでに独立している。そうした説話を集めて一本とした本書は、これとは同時代といつてよい『ノヴェッリーノ(説話集)』や『デカメロン』に通じる一面をもっている。『食卓の書』は、教訓説話集と世俗物語集の中間に位置する作品といえることができる。

本書から二つ説話を引用してみよう。一つは第一巻、食卓での説話集から、「イキリヌス殿の読書を習い覚えた熊」と題されたものである。



(B) 説教者修道会士グイド・アリミネンシスが食卓でこんなことを語った。イキリヌス・デ・ロマーノ殿は一匹の熊を飼っていた。彼はある修道院長をひどく嫌っていて、この修道院長を修道院から追い出したかった。そこで修道院長にこういった。「修道院長殿、あの熊に文字を覚えさせなければ、修道院から追い出しますぞ」。彼は答えた。「どうしてそんなことができましょう」。

ある友人が修道院長に「ひと月猶予を下さいといいなさい」といった。修道院長は熊を連れて引き下がった。修道院長の友人は、熊はものを食べるときいつもなり声を出すという習性を知っていた。そこで大きな本を取り出し、ページの間に熊が好んで食べるものをおき、熊を空腹にさせた上でその前に本をおいた。熊は食物の匂いを嗅ぎ、爪でページをめくり、みつけたものを食べたが、その間ずっとうなっていた。そのさまは、あたかも熊が自分の言葉で読んでいるかのように見えた。こうして熊にこのしぐさを完全に覚えさせた。

……べこべこに腹をすかせた熊が、イキリヌス殿の邸宅に連れて来られ、他の殿様たちの面前に引き出され、その前に本がおかれた。熊は以前同様ページをめくった云々。大変愉快な光景であった。イキリヌス殿は自分の方が修道院長職を奪いそこねた。

この話は、誰かが食卓でぶつぶついついてるとき話すとよい。

最後の一文は「教訓」*Moralisatio*と呼ばれ、教訓説話集では各説話の最後におかれて、本来は説話の意義や説教での使用方法を説明するものである。しかしここではすでに本来の教訓とはかけ離れたものとなっている。

もう一つは同じく第一巻より、「喜捨と歓待によって財をなす話」と題する物語である。

(C) マルクス・ミリオン殿の語るところでは、カムールという地方にはたいそう愉快な人々がいて、次のような習慣をもっている。旅人が家に来て宿を求めると「主人は」大喜びし、妻や娘を差し出して旅人に望むようにさせ、自分は家から出て二、三日外で暮らす。旅人はあらゆる肉の快楽をむさぼる。ある時、タルタル人の君主——彼はカムールの君主でもあった——のもとにこの慣習が伝えられると、彼はカムールの人々に、旅人に妻を差し出すような汚らしい振舞は決してはならぬと命じ、「違反者には」罰を科した。困惑したカムールの人々はタルタル人の君主のもとに使者と贈物を送り、この命令を撤回してほしいと願った。というのも、彼らの先祖たちのいうところでは、旅人に対するこうした歓待は、収穫と財産を増やすがゆえに彼らの偶像のたいそう喜ぶところであるからだ、というのである。タルタル人の君主はこれを聞くと、「かかる破廉恥行為も、汝らがしたいならするがよい」といった。かくて彼らは今もこの慣習を守っているのだ。



ある。

この話は、貧者が喜捨や宿を求めてきたとき、食卓で語るにふさわしい。その際修道士は、神は喜捨を喜ぶこと、水が火を消すがごとく喜捨は罪を消すこと、……キリストは世の終わりに汝らの憐憫の行為を調査するであろうこと、したがって喜捨は我々が天国に行くか地獄に行くかを決めるものであることを語るとよい。また喜捨は人を死から救い、上記の話にあるようにこの世の富を増やしてくれるのである。

前半の説話に出てくるマルクス・ミリオンはマルコ・ポーロのことであり、この説話自体が彼のいわゆる『東方見聞録』からの引用である。こうした異国の珍奇な慣習は、説教でもときおり教訓説話として使われることがある。しかしこの説話は艶笑小話として聴衆の興味を引くものではあっても、キリスト教モラルの例とするのはどうみても無理がある。後半の教訓はこじつけの観を禁じえない。しかしこの説話と教訓のちぐはぐさは、むしろ教訓説話集と世俗物語集の中間という本書の性格を浮き上がらせているように思われる。

#### 〈聖書語釈集〉

教訓説話とならんで、説教を展開する上でもう一つ重要なのは「(聖書) 語釈」*distinctio* という技法である。これは *distinctio* という語の原義「区別、識別」が示す通り、聖書に現れる重要単語に秘められた(複数の)意味を識別し、掘り起こしていく手法である。こう

した手法自体はすでに教父時代以来「釈義」*exegesis* として確立されており、伝統的な釈義では一語につき、「字義通り」*literal*、「寓意的」*allegorical*、「象徴的」*anagogical*、「比喩的」*tropological* の四つの意味を区別する。しかし一二世紀末以降、説教が活発化する中で、この四区分にとらわれず自由に、また数多くの意味を取り出してこれを説教に応用するようになった。これが「語釈」である。本稿ですでにみたところでも、ボナヴェントゥラは「中心」*medius* の語を三通りに(U)、カヴァルカンティは「癒された」*sanatus es (sanare)* の語を七通りに(W)解して分割や再分割に用いていた。すなわち、キーワードの意味の広がりや多義性を利用して説教を展開するのが語釈である。

この手法を説教師が容易に使えるように、聖書の重要単語を選んでアルファベット順に並べ、各語について複数の語義ないし解釈を提示したものが「聖書語釈集」*distinctiones* である。一二世紀末以降いくつもの語釈集が編まれたが、初期の例としてペトルス・カントル(？)一一九七)の『アベルの大全』から「鳥」*avis*の項目を見てみよう。

(D) 鳥とは、

「高きに向かう者」、すなわち義しき者である。魚も鳥も同じ素材からなる。すなわち悪はこの世の水の中にとどまり、鳥すなわち善は高きに向かう。

「高きにとどまる者」、すなわち天使である。汝の秘められた



寢室にて王を誹謗するな。天の鳥がそれを王に告げるであろう。

【コヘレトの言葉】一〇—二〇】

「高きにおいて害をなす者」、すなわち傲慢である。汝が驚のごとく天に昇ろうとするなら、私は汝を誹謗するであろう。

「強欲」、すなわち悪魔である。種の譬えにおいて、鳥は「蒔かれた」種を食べたといわれている。<sup>80</sup>「ルカによる福音書」八一—

五】

……………後略……………

説教師は、もし主題中に「鳥」の語があれば、本書を参照して分割ないし再分割し、その各々に聖書の章句を権威として引用し、また教訓説話をはさんでいけば、説教の一部を作り上げることができた。

一三世紀をすぎるうちに語釈集はさらに精密化し、項目・語義がふえるとともに、説教師の便を図ってさまざま工夫がこらされることになった。たとえばクロスレフランスによって類義語や反対語の参照を求めたり、また同一項目中对立する二語を並置する場合もある。たとえばニコラ・ド・ピアールの『聖書語釈集』（一三世紀後半）では、「鳥」の項目は次のように構成されている。

(E) 天の鳥les oiseauxとは悪魔のことである。「マタイによる福音書」一三。

その住処ゆえに。「エフェソの信徒への手紙」六一—二。汝ら

の闘いは血肉を相手にするものではなく君主と権力、この世の支配者を相手とするものである云々。

傲慢なる知性ゆえに。「ヨブ記」四一—二五。ここではべへモットについて語られている。あらゆる崇高なるものを見、傲慢な息子たちすべてを支配する王こそ彼である。

……………中略……………

禽 volucres とは聖人のことである。

軽やかに飛翔するゆえに。「ヨブ記」五—七。人間は働くため、鳥は飛ぶために生まれる。羽のない鳥は飛べないことに注意せよ。ゆえに「イザヤ書」三九「四〇—三一」。「主に望みをおく人は力を得、驚のごとき羽を得る。飛んでも弱ることはない」。

巣作りの知恵ゆえに。巢の外は厳しいが、巢の内は心地よい。「マタイによる福音書」八一—二〇。「狐には穴があり、空の禽には巢がある」<sup>81</sup>。

……………後略……………

ここでは「鳥」の項目に aves と volucres の二語をあげ、両者を善悪に対応させて、各々に複数の解釈をあたえている。さらに関連する聖書の個所まで指示している。ここまで配慮してあれば、説教師にとって、「鳥」を展開して分割や再分割の一つを練り上げるのはきわめて容易であつたらう。



〈説教術書〉

これまで各所でふれてきた新説教の技法を要約すれば、主題を分割、再分割し、その各部分を教訓説話、語釈、聖書の権威などによって展開し、展開にあたっては一人二役の対話法、身振り、小道具まで援用することがある、といったものである。また、冒頭に副主題とその展開をおくこともある。こうした説教技法を理論的に体系化したものが「説教術書」*ars predicandi*である。説教術書の中から、これまでの議論と関わりのあるところをみてみよう。

新説教においてもっとも重要な技法は主題の分割である。ロバート・オヴ・ベイスヴォーン『説教の形』(一三二二)によれば、主題は三つに分割するのがもっともよいという。その理由は、「三」は三位一体の「三」であり、三重の綱は切れにくく、またとくに説教に当てられた時間にふさわしいからだという。一例として「神は、律法のもとに女から生まれた自身の息子を送ったが、それは彼が律法のもとにあらたな人々を救うためであった」*Misit deus filium suum factum ex muliere, factum sub lege, ut eos qui sub lege erant redimeret*を主題としてあげ、これを次のように三分割してみせる。

(F) ここには一七語あるが、全体を三つに分割し、これらの言葉で三つの事柄を表すようにすることができる。つまり、「神は自身の息子を送った」*Misit deus filium suum*から、惜しみなく費やされた荘厳、「律法のもとに女から生まれた」*factum ex*

*muliere sub lege*から、美德を通じて示された謙遜、「律法のもとにあった人々を救うため」*ut eos qui sub lege erant redimeret*から、惜しみなく広められた有益、である。<sup>(89)</sup>

ただし *esse* のような連結動詞、*ex* のような前置詞は、特別の場合を除きそれ自体を独立させて一分割とすることはできないと注意する。<sup>(90)</sup> ついで第一分割「神は自身の息子を送った」を例に、再分割の方法を示す。

(G) 分割された各部分はその内部の分割「再分割」と一致するように配慮すべきである。たとえば、「神は自身の息子を送った」という場合の荘厳さ云々である。「言葉の」対応に注意せよ。「神」は「荘厳」に、「送った」は「費やした」に、「自身の息子を」は「惜しみなく」に対応するようにである。<sup>(91)</sup>

ただし実際には分割と再分割にこのようなきれいな対応関係を打ち立てることは困難で、ロバートもそのことは認めている。

ロバートは展開の技法も詳細に論じている。八項目に分けてあげる展開技法の第三番目にはこうある。

(H) 第三の展開技法は推論ないし議論によるものであり、これは説教では三つの仕方で見られる。第一は推論が二つの対立物、つ



まり肯定するものと否定するものを扱う場合である。たとえば、禁欲の遵守を説く場合、淫蕩は金、体、名声を破滅させると説く。こうして禁欲は保たれる。もう一つは省略推論法によるもので、これは聞き手に問いかけて結論を出させる方法である。たとえば敵が自分を縛り首にしてしまう縄を作る者は愚か者というべきではなからうか。……第三の推論技法は教訓説話によるものである。これは俗人に有効で彼らは教訓説話を好む。

ここで第一番目にいう「二つの対立物」による推論は、さきにもたニコラ・ド・ピアールの「鳥」に関する語釈法(E)に対応する。また二番目の、聴衆に問いかける「省略推論法」はベルナルディーノが活用している(B)ことはすでにみた。教訓説話については別の箇所でもその使い方に注意を促している。

(I) キケロによれば時宜を得たユーモアは、聴衆が退屈しかけたとき、なにか愉快なことをいって楽しませるときに生ずる。笑いを誘うようなことでも、物語でも逸話でもよい。これはとくに聴衆が居眠りし始めたとき用いるべきである。……「ただし」この文飾はあまり使いすぎないように、一回の説教で三回以内にとどめるべきである。

ロバートはこのように教訓説話は節度をもって使うように戒めてい

る。使いすぎは説教を、教化という本来の目的から、世俗的な娯楽に逸脱させてしまう恐れがあるからである。したがって彼は身振りや小道具などの使用にも批判的である。

(J) 適切な身振りとは、ユージ「ド・サン・ヴィクトル」が『修練士の教育』でいっているように、口だけを使って話すこと、論争する者のように手を派手に振り回したり、狂人のように頭を動かしたり、役者のように目を回したりしないことである。よくこうしたことをする者がいるが、誤りである。これはなにごとく巧みに語れない者がすることである。

現実にはむしろこの逆で、田舎芝居めいた説教が横行していたらしいことは、さきにロベルト・ダ・レッチェの例でみた通りである(P)、(Q)。

説教術書は、他の説教史料にくらべると残存写本数ははるかに少ない。つまり一般の説教師が頻繁に参照する書物ではなかったようである。内容をもても、実用を第一に考えたマニユアルというより、修辭学の理論書という印象が強い。したがってこれらから中世説教の実態を探るのは問題があり、つねに筆録説教、範例説教など説教現場に密着した史料と対照させつつ利用すべきものといえよう。



## 五 おわりに——再び「声の影」をめぐって

サヴォナローラは「書かれた説教は生ける声の影にすぎぬ」といった。その意味は、文字は結局、「生ける声」がもつ独自の力を再現しえない、ということであった。しかし「声の影」という表現は、サヴォナローラの意図をこえて、さらに遠くまでわれわれをいざなう力をもっている。書かれた説教が「声の影」であるというなら、その影はいかなる影なのか。影は本体（声）にない独自の性格を帯びることがあるのではないか。

筆録説教には、ときにこうした問いを誘発するような個性の強いものがある。マルゲリータ・ソデリーニという、一五世紀フィレンツェの一女性——この人物についてはすでにふれた（H）参照——が残した筆録（図1）がその一つである。この筆録には句読点も、文頭の印（大文字など）も、段落分けも一切ない。とくに目立つのが、単語の区切りがきわめて自由あるいは恣意的である点である。図2は図1を忠実に転写したものであり、図3は、さらに続け書きを解いて各語を独立させたものである。これからわかるように、二語や三語が続け書きされるかと思えば、一語が独立している場合もあり、続け書きと分かち書きの間にはとくに原理や一貫性はない。マルゲリータは自由に奔放に書いている。

この自由さは「声の影」ではないだろうか。書字が独立して安定せず、説教という声のすぐ近くで書かれるとこのような奇妙な筆跡にな

### 「声の影」

るのではないだろうか。こう考えるのは、近年P・サンガーが『語間の空白』で明らかにしたように、分かち書きは中世に起こった一つの知的革命であったからである。彼によれば古代から受け継いだ連続記法は、一二世紀頃を境に分かち書きに移行し始めるが、この移行には音読から黙読へというもう一つの移行がともなっていた。読書から声が消えたところで分かち書きが始まったのである。そして黙読と分かち書きの登場は、書字や書物の形態、さらには思考様式まで一変させた。サンガーはいう。こうした背景の中においてみれば、マルゲリータの筆跡は、声と文字のある独特の関係を証しているように思われるのである。

それともこの筆跡は筆者が女性ゆえのものであろうか。一五世紀フィ

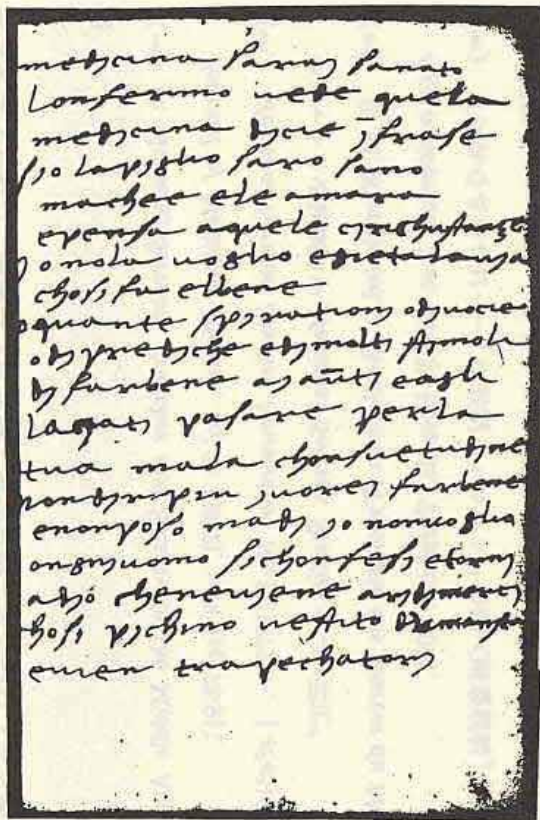


図1 マルゲリータ・ソデリーニの筆録説教



レンツェの女性が文字から排除されていたわけではないが、男性にくらべれば文字は女性にとって遠い存在であった。そうした女性が不慣れな手で記したために、このような筆跡となったのであろうか。

この不思議な書体は「声の影」なのか、ジェンダーなのか、それもマルゲリータという人物の個性なのか。今は十分答えられないが、しかし、現代のわれわれは説教という中世の声に文字を通じてしか迫

medicina sarai sanato  
lonfermo vede quela  
medicina dicie *infrase*  
sio *lapiglio* saro sano  
*machee* ele amara  
*epensa aquele* circhustanze  
io *nola* voglio *egietalavia*  
chosi fa *elbene*  
*oquante* spirationi *odivocie*  
o di prediche *edimolti* stimoli  
di *farbene aiavuti eagli*  
laciati pasare *perla*  
tua mala chonsuetudine  
*nondirpiu ivorei farbene*  
*enonposo madi io nonvoglio*  
*ongniuomo sichonfesi etorni*  
*adio cheneviene aridimerti*  
chosi pichino vestito dumanita  
*evien trapechatori*

図2 図1の忠実な転写  
(斜体字部分が続け書き)

medicina sarai sanato  
lonfermo vede quela  
medicina dicie *infra se*  
sio *la piglio* saro sano  
*ma che e* ele amara  
*e pensa a quele* circhustanze  
io *no la* voglio *e gietala via*  
chosi fa *el bene*  
*o quante* spirationi *o di vocie*  
o di prediche *e di molti* stimoli  
di *far bene ai avuti e a gli*  
laciati pasare *per la*  
tua mala chonsuetudine  
*non dir piu i vorei far bene*  
*e non poso ma di io non voglio*  
*ongni uomo si chonfesi e torni*  
*a dio che ne viene a ridimerti*  
chosi pichino vestito dumanita  
*e vien tra pechatori*

図3 図2の続け書きを分離したもの

りえないとすれば、筆録に「声の影」を求め続けるほかないのである。

註

- (1) C. Muesig, 'Sermon, Preacher and Society in the Middle Ages,' *Journal of Medieval History*, vol.28 (2002), p.74 [pp.73-91].
- (2) *Medieval Sermon Studies Newsletter*, No.1 (1977) — 一九九六年よりタイトルを変更して *Medieval Sermon Studies* として刊行。
- (3) B. M. Kienzle (ed.), *The Sermon (Typologie des sources du Moyen Age occidental, fasc. 81-83)*, Brepols, Turnholt, 2000.
- (4) 「文字のかなたに——五世紀フィレンツェの俗人筆録説教」前川和也編著「コミュニケーションの社会史」ミネルヴァ書房、二〇〇一年、一三九—一六八頁。
- (5) 'predicationes scripture sunt umbra respectu vive vocis,' A. F. Verde OP (ed.), *Il breuario di frate Girolamo Savonarola*, Firenze, 1999 (Recensione di V. Branca in *Il Sole 24 Ore*, domenica 9 gennaio 2000-N.8, p.8).
- (6) 「危険ユエニ説教スベカラズ」——シエナのベルナルディーノにおける商業・商人観」前川和也編著「ステイタスと職業——社会はどのように編成されていたか」ミネルヴァ書房、一九九七年、一五六—一八〇頁。「説教の「声」と「聞き手」——一五世紀トスカーナの俗人筆録説教」『歴史学研究』七二九（一九九九年）、一九九—二〇五頁。前掲「文字のかなたに」。「ベルナルディーノとモンテ・ディ・ピエタ設立運動——パヴィア



を中心として『ベタリヤキ全集』五一(二〇〇二年)、七六一―九八頁。

- (7) Bernardino da Siena, *Prediche volgari sul Campo di Siena 1427*, ed. by C. Delcorno, Milano, vol.I, pp.82-84.
- (8) *Ibid.*, p.557.
- (9) *Ibid.*, p.37 (Introduzione di C. Delcorno).
- (10) *Ibid.*, pp.557-558.
- (11) *Ibid.*, p.241.
- (12) *Ibid.*, pp.560-561.
- (13) 複製書籍「聖家ナリ……」一六二―一六四頁。
- (14) Bernardino da Siena, *Prediche*, vol.II, p.1143.
- (15) *Ibid.*, vol.I, p.194.
- (16) Biblioteca Nazionale di Firenze, ms. Maglib. 98, f.90r. 前掲書籍「文字のななだ」一四一頁。
- (17) Z. Zafarana, 'Per la storia religiosa di Firenze nel Quattrocento. Una Raccolta privata di prediche,' *Studi Medievali*, 3a ser., vol.IX (1968), p.1042. 複製書籍「文字のななだ」一五九頁。
- (18) Giordano da Pisa, *Quaresimale fiorentino 1305-1306*, ed. by C. Delcorno, Firenze, 1974, p.292. 前掲書籍「文字のななだ」一四八―一四七頁。
- (19) Giordano da Pisa, *Prediche inedite (dal ms. Laurenziano, Acquisti e Doni 290)*, ed. by C. Iannella, Pisa, 1997, p.39.
- (20) *Ibid.*, pp.39-40.
- (21) R. Rusconi, 'Reportatio,' *Medioevo e Rinascimento*, vol.III (1989), p.28 [pp.7-36].
- (22) N. Bériou, 'La reportation des sermons parisiens à la fin du XIII<sup>e</sup> siècle,' *Medioevo e Rinascimento*, vol.III(1989), pp.110-111 [pp.87-123].
- (23) *Ibid.*, p.95, n.32.
- (24) 複製書籍「文字のななだ」一四六―一四七頁。
- (25) N. Bériou, *La prédication de Ranulphe de la Houblonnière. Sermons aux clercs et aux simple gens à Paris au XIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1987, vol.II.
- (26) Rusconi, 'Reportatio,' p.11.
- (27) 複製書籍「ベタリヤキ全集」一八四頁。
- (28) *Sermoni del Bernardino Tomitano da Feltrè, nella redazione di fra Bernardino Bulgarino da Brescia Minore Osservante*, ed. by P. C. Varischi da Milano, Milano, 1964, tomo II, p.186.
- (29) Rusconi, 'Reportatio,' p.13 and p.13, n.29.
- (30) O. V. Ravaoli, 'Testimonianze della predicazione di Roberto da Lecce a Padova,' in *Predicazione francescana e società veneta nel Quattrocento: committenza, ascolto, ricezione. Atti del II Convegno internazionale di studi francescani, Padova, 26-27-28 marzo 1987*, Padova, 1995, p.191 [pp.185-220]. やななだのトットン聖書家と谷聖sisataが残っている。その意味はむづかとも判じかねた。
- (31) *Ibid.*, pp.191-192.



- (82) C. Frugoni, 'L'immagine del predicatore nell'iconografia medievale (secc. XIII-XV)', *Medioevo e Rinascimento*, vol. III (1989), pp. 287-299.
- R. Rusconi, '«Trasse la storia per farne la tavola»: immagini di predicatori degli ordini mendicanti nei secoli XIII e XIV', in *La predicazione dei frati dalla metà del '200 alla fine del '300. Atti del XXII Convegno internazionale Assisi, 13-15 ottobre 1994*, Spoleto, pp. 405-450; id., 'Giovanni da Capestrano: iconografia di un predicatore nell'Europa del '400', in *Predicazione francescana*, pp. 25-53; id., 'Le pouvoir et la parole: représentation des prédicateurs dans l'art de la Renaissance en Italie', in R. M. Dessi and M. Lauwers (eds.), *La parole du prédicateur Ve-XVe siècle*, Nice, 1997, pp. 445-456.
- (83) D. L. d'Avray, *The Preaching of the Friars. Sermons Diffused from Paris before 1300*, Oxford, 1985, pp. 1-11, 13.
- (84) Sancti Bonaventurae, *Sermones dominicales*, ed. by J. G. Bougerol, Grottaferrata, 1977, pp. 156-157.
- (85) *Ibid.*, p. 157.
- (86) *Ibid.*, pp. 157-158.
- (87) *Ibid.*, pp. 158-159.
- (88) J. B. Schneyer, *Repertorium der lateinischen Sermones des Mittelalters für die Zeit von 1150-1350 (Autoren: A-D)*, Münster, 1991, 'Einführung', p. 4.
- (89) S. Bonaventurae sermones de tempore, de sanctis, de B. virgine Maria et de diversis, S. Bonaventurae opera omnia, tomus IX, Quaracchi, 1901, pp. 23-461.
- (90) C. L. Polecchia, *Preaching Peace in Renaissance Italy: Bernardino of Siena & His Audience*, Washington D. C., 2000, pp. 163-185.
- (91) P. Michaud-Quantin, 'Guy d'Évreux O. P., technicien du sermonnaire médiéval', *Archivum Fratrum Praedicatorum*, vol. 20 (1950), p. 225, n. 25. [pp. 213-233].
- (92) 'Tractatus de contractibus et usuris', in S. Bernardini Senensis opera omnia, tomus IV, p. 118.
- (93) L.-J. Batallion, 'Les images dans les sermons du XIII<sup>e</sup> siècle', *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie*, 37-3 (1990), pp. 354-355 [pp. 327-395].
- (94) d'Avray, *op. cit.*, pp. 57-62, 74-75, 99-103; M. E. O'Carroll SND, *A Thirteenth-Century Preacher's Handbook. Studies in MS Laud Misc. 511*, Toronto, 1997.
- (95) L. Gaffuri, 'Nell'«Officina» del predicatore: gli strumenti per la composizione dei sermoni latini', in *La predicazione dei frati*, pp. 81-111.
- (96) C. Brémond, J. Le Goff and J.-C. Schmitt, *L'«exemplum»*, Turnholt, 1982, pp. 37-38.
- (97) Bériou, *La prédication de Ranulphe*, vol. II, pp. 108-121.
- (98) *Ibid.*, p. 118.



- (49) d'Avray, *op. cit.*, p.103.
- (50) 巨雅子「初期説教者修道会の活動とその特質——説教活動を中心に」『史友』(青山学院大学史学会)一三三(一九九一年)、一一—一四頁。藤田なち子「十三世紀エクセンブラにおける告解の問題」樺山紘一編『西洋中世像の革新』刀水書房、一九九五年、一四一—一六二頁。石坂尚武訳「パッサヴァンティ『真の改悛の鑑』(一)——十四世紀黒死病時代のドミニコ会士説教集」『人文学』(同志社大学人文学会)一六六(二〇〇〇年)、四二—八八頁。「同(2)」同、一六九(二〇〇一年)、七二—八七頁。「同(3)」同、一七七(二〇〇一年)、七一—一〇頁。石坂尚武「十四世紀黒死病時代の説教説話集——十三世紀例話と中世カトリシズムの伝統から見る」同、一七一(二〇〇二年)、七五—一二七頁。川原田知也「十字軍とエクセンブラ」ジャック・ド・ヴィトリとハイステルバッハのカエサリウスを例に」『中央大学大学院論究』三三三(二〇〇一年)、一一二—一二六頁。J・ル・ゴッフ(渡部香根夫訳)『中世の高利貸——金も命も』法政大学出版局、一九八九年。A・Y・グレーヴィチ(中沢敦夫訳)『同時代人の見た中世ヨーロッパ——十三世紀の例話』平凡社、一九九五年。
- (51) S. Amadori, *Un trattato domenicano del XIV secolo: il "Liber mensalis" di Filippino da Ferrara*, tesi di laurea in Istituzioni Medioevali, Anno Accademico 1993-94, Università degli Studi di Bologna, vol.1, p.1.
- (52) *Ibid.*, pp.227-228.
- (53) *Ibid.*, pp.29-31
- (54) Marco Polo, *Milione. Le divisaient dou monde*, Milano, 1982, pp.

- 68-69, 374-375. ヴェルノ・キロー(愛宕松男訳注)『東方見聞録』平凡社一九七〇年、一二五—一二六頁。
- (55) 前掲拙稿「危険エヒニ……」一六四—一六五頁。
- (56) Richard H. and Mary A. Rouse, 'Biblical Distinctions in the Thirteenth Century', *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Age*, année 49, vol.41 (1975), pp.27-37.
- (57) *Ibid.*, p.28.
- (58) *Ibid.*, pp.34-35.
- (59) 本書については原典を参照したうえで、たので英訳から引用する。Robert of Basevorn, *Forma praedicatorum*, transl. by J. J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages. A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance*, Berkeley-Los Angeles-London, 1974, p.139.
- (60) *Ibid.*, p.138.
- (61) *Ibid.*, p.139.
- (62) *Ibid.*, pp.181-182.
- (63) *Ibid.*, p.212.
- (64) *Ibid.*, p.212.
- (65) Biblioteca Nazionale di Firenze, ms. Magliab. XXXV, 98, f.56r. 前掲拙稿「文字のかなた」一五四頁。図1掲載個所の訳文は以下の通りである。「〔前頁〕医者がある病人にいう、「この薬を飲んだら」よくなりますよ。病人はこの薬を見て「これを飲んだらよくなるんだらう、でもなして苦しんだ」といふやう。こうした場合「俺はこやだ」といふ



て彼は薬を捨ててしまふ。善行についても同じだ。おお、お前は声や説教や多くの刺激によって善をなせという教えをあれほど受けながら、お前の悪い癖で怠ってきた。「善をなしたいけどできない」などといつてはいけない、「したくない」といいなさい。人はみな告解し神のもとに帰るべきである、神はお前「の罪」を贖うために来られる。「神は」小さな人間の姿をして罪人たちのもとにやってくる。」

- (9) P. Saenger, *Space Between Words. The Origins of Silent Reading*, Stanford, 1997. P. サンガー「中世後期の読書」R・シャルチェ／G・カヴァッロ編(田村毅他訳)『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店、二〇〇〇年、一五七—一八八頁。

- (10) C. Klapisch-Zuber, 'Les clefs florentines de Barbe Bleue. L'apprentissage de la lecture,' in id., *La maison et le nom. Strategies et rituels dans l'Italie de la Renaissance*, Paris, 1990, pp.309-330.